



ピッポ新聞

2006

11

No.213

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

子どもの本専門店

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

福音館書店への質問

今回の総括

専売品・二重価額・限定出版

ピッポ 伊藤俊男様

いつも格別のお引き立てを賜りありがとうございます。

さて、先日ピッポ新聞10月号の件で回答をしないのは何かとの質問の電話をいただきました。小社は、5月30日付け書店にお手紙をさし上げ、その件はピッポ新聞6月号に掲載をいただきました。しかしながら、その後ホームページ上のバックナンバーでは、約4ヶ月間にわたって6月号のみ削除された状態になっておりました。本日、6月号を再度アップしていることを確認いたしました。小社としては、6月号での回答の見解に変更はございません。

末筆ながら今後の貴店のご発展をこころより祈念しております。

2006年11月2日

福音館書店 小倉昇

というお返事を福音館書店の小倉さんからいただきました。この中で小倉さんもおっしゃっているように、10月の下旬、ぼくは小倉さんに直

接電話をしました。6月号の小倉さんの回答は、ぼくの質問に添えてくれていない旨と、新たに質問した「限定出版」に対しての回答をくださるようお願いをいたしました。結果、送付いただいたのが、前掲の文章です。

ここです、一つおことわりいたします。それは、小倉さんのご指摘のように、Web版ピッポ新聞6月号が約4ヶ月(この期間は小倉さん指摘による)削除されていきました。この削除されていたという事は、ぼく自身は全く気付いていませんでした。迂闊にも小倉さんの指摘で初めて知った次第です。

思い当たることを考えてみますと、以前サーバーのトラブルで一時期ピッポのホームページがネット上に表示出来ないことがありました。回復したときにたまたま再表示し忘れてしまったのかもしれません。ホームページの一部を専門の会社に管理委託しているものですから、細かいチェックができなかったのだと思います。

いずれにいたしましても小倉さんには、表示されていないことをご指摘いただいたこと、当ホームページをよくご覧いただいたことにとても感謝しております。

ぼくはその削除されていた期間、福音館の回答をホームページのWeb版ピッポ新聞を見てくれた方にお読みいただけなかったことが残念でたまりません。この総括をお読みいただく上でも、また、福音館書店が普段、読者というものをどう考えているかが良く理解できますから、まだお読みでない方は是非お読みいただければ幸いです。

さて、今回ぼくが福音館書店にお聞きしたかったのは主に次の3点です。

1、誰もが入手できる本屋などの一般の書籍流通ルートでは品切れ(入手不可能)にさせている本を、こどもものとも社からだけ入手できるようになっているのは何故ですか？

2006年(本年)のこどもものとも社のカタログに、「特選ライブラリー」「かがくライブラリー からだのひみつ」「年少版ライブラリー えほんのいりぐち」「知識ライブラリー」という各12冊(毎月1冊配本)というシリーズが掲載されています。これを福音館書店のホームページで検索しますと、「特選ライブラリー」12冊全点「かがくライブラリー からだのひみつ」5冊「年少版ライブラリー えほんのいりぐち」6冊「知識ライブラリー」10冊が品切れとなっていて、一般読者は購入することができません。その一方で、福音館は、こどもものとも社だけにこれを販売させているのですね。

念のため今回、小倉さんに電話したおりに聞いてみました。「こどもものとも社の専売品は本屋が注文した場合出荷してくれない(本当に不当です)ことは承知しています。が、読者が直接福音館へ注文しても出荷しないのですか?」「出荷しません」という返事でした。

ぼくはこの点を質問文で読者差別だと指

摘したのですが、福音館は法律に抵触する行為ではなく何ら問題はないという回答でした。

しかしぼくは、読者の存在を念頭に置たうで、何故こどもものとも社だけの専売品を福音館が出版し続けるのか、その考えこそをお聞きしたかったのです。

2、同じ本なのにこどもものとも社で専売品として売られている本の方が365円安いのは何故ですか？

これは2005年版のこどもものとも社のカタログによると「ずかんライブラリー」として12冊のシリーズが専売品として掲載されていますが、ここに掲載されている本12冊全部が、現在は一般の流通ルートでは品切れで入手することができません。

しかし、このシリーズの一部はまだ「みずかんかんじるずかん」として本屋で流通しています。(詳細は3・7月号に)その定価は1365円(消費税込み)ですが、「ずかんライブラリー」は1000円(消費税込み)で販売しているのです。

ここで問題なのは、まず一般の読者がこの本を「こどもものとも社の専売品」であるが故、自由に買つことができないことです。さらに問題は、同じ本なのに書店で売られている価額と、こどもものとも社の価額がちがうことなのです。出版社である福音館は同じ本なのに二つの価額を設定し、しかも一方を安くしているのです。

このことに関して、福音館の回答は出版社の裁量範囲であるというものでした。

ここで求めたことは、裁量権であると切り捨てるのではなく、当然二重価額を設定した理由があるはずですから、それを読者にも理解できる説明だったのです。

このシリーズはぼくが知る限り、2002年にも同じように二重価額で販売され、今回で2回目です。いわばこの二重価額に関しては、福音館は確固たる理由をお持ちのようですね。

3、福音館書店の限定出版とは、どういうことをいうのですか？

今年の初め「こどもものともセレクション」と題して、「こどもものとも」のバックナンバーから15冊の絵本がハードカバーで出版されました。いずれも読者から再版の要望があつた絵本を出版したということです。

ご存知の方も多いと思いますが、その表紙には「限定出版」というシールが貼られていました。ところが、一部の絵本(複数点)は間もなく重版されました。

ぼくはもし表紙に「限定出版」というシールが貼られていなければ、なんら問題はなかつたと思います。ところが、限定出版とわざわざ宣言して、そのことを読者に訴求したのですから、売り切れたとしても、当然重版をしないのが読者との暗黙の契約になるのだと考えます。

出版社や新聞社など言論をもって生業としている企業は、他のどんな企業よりも自

らが発した「言葉」を大切にしなければならぬものと考えます。それに鑑みると今回の福音館の重版には疑問を持たざるをえませんでした。

小倉さんの今回の回答にはこの質問に関しては一切触れられていませんでした。ぼくは福音館は読者に対して「限定出版」に関する説明責任があると考えますが、

さて、今回ぼくの公開質問状は、主にこの3点を内容とするものでした。(3番目の「限定出版」の質問は7月号の再質問に追加したものです)この間、ピッポ新聞紙上では3月号、5月号、7月号、10月号の4回福音館書店に対して何らかの形で繰り返しこちらの質問を載せ、6月号で福音館の回答を載せ、今号(11月号)では福音館の回答(?)と、こちらの総括を載せて締めくくりにしたいと考えました。

ぼくは福音館書店が戦後子ども本の世界で出版社として果たしてきた役割をとて、も高く評価している読者の一人です。今もその評価を変えることはありません。だがしかし、どんな組織でも長い間には制度疲労というものは必ず起きるものであることも否定しがたい事実なのです。

例えば、「限定出版」について、読者には一切説明もなく重版してしまつたということが、内部では全然問題にもならないことが、ぼくには不思議でならないのと同時に危惧する点なのです。読者のぼくからすれば、「限定出版」と約束しながら重版す

ることは、良くある不動産広告のように、サギとしか写らないのです。

もし、福音館の社員が自分たちの出版活動を自由な言論活動の大切な一翼を担っていることを認識しているのなら、「こんな重大なことが内部で問題にならないなんて!」というのが外部のぼくには不思議なのです。

そつ!まさに危惧なのです。

約2年前ぼくは「大型絵本」についてやはり福音館に公開質問状を出して、「大型絵本」は絵本の持つている芸術性を台無しにしてしまつし、「読み聞かせ」というものに誤解を与えてしまつ出版であると問題提起しました。

この問題について言えば、残念なことにはぼくの危惧した通りの方向に進んでいるようです。その後、あちこちの出版社から「読み聞かせ」ブームに乗って「大型絵本」は出版され続けています。

つい数日前、市立図書館で受け入れ作業をしていたら、なんと、「もこもこ」(谷川俊太郎・作 元永定正・絵 文研出版)の「大型絵本」に出会って、ショックを受けました。

この絵本は当店でも定番中の定番の一冊でよく売れる絵本です。この「大型絵本」を繰って見た感じは、気持ち悪いだけでした。これを何故大型化する必要があるのかぼくにはとうてい理解できません。

考えられるのは、この絵本の人気を利用して、さらなる利益を得たいということだ

けでしょう。

安易すぎませんか!

だって、製本フィルムさえあれば、大型絵本は簡単に作れてしまうのですから、出版社も作者もこの絵本に対して何の努力もしない(必要もない)で、売ればしめたものということなのでしょう。この絵本一冊7980円(税込み)ですものね。

実は、ぼくはこういう子ども本の安易な出版傾向に福音館書店こそ、その出版内容では「それは、ちがうぞ!」というアンチテーゼを発信して欲しかったのです。

ところが、30年近く子ども本専門店をやりながら福音館を外から眺めてきて、最近の福音館は、その出版活動が易きに流れているように感じられてならないのです。

ぼくの感じるところでは、今やますますその傾向に拍車がかかっているように思います。敢えて歓迎されないであろう質問をしたのもこのことを思つてのことでした。

しかしながら、今回のぼくの質問には、皆さんもお読みの通り、福音館の誠意ある回答を得ることができました。ぼくが制度疲労と感じた所以もここからきています。

今回を持って一応この問題の総括として、紙面では幕を閉じることになります。

願わくば、ぼくの今回の質問や福音館の回答をお読みいただいた方で、ご意見や質問をお持ちの方はそれを是非お寄せいただけないでしょうか。そこから新たな展開が生まれることを期待したいと思います。お読みいただいたてありがとございました。

ねー、この本読んだ？
今月は新刊絵本から6冊

まずは、冬の絵本3冊



『もりからのてがみ』(片山令子・作 片山健・絵 福音館書店 840円)

冬になって、あまり外で遊べなくなつたひろこさんはともだちに手紙を書きます。初めはリスに書き、その手紙を樅の木につるします。つぎはトカゲにと・・・、ひろこさんはどんなことを手紙に書いたのでしょうか。こどもとも傑作集



『ちいさなふゆのほん』(ユレル・クリス ティーナ・ネー スルンド・文 クリスティーナ・ディーグマン・絵 ひしきあきら・訳 福音館書店 1155円)

スウェーデンの絵本 スウェーデンの冬の気候風土のなかでの子どもたちの遊びや暮らしを分かりやすく描いた絵本。雪の降る国の遊びは色々あるんだね、毎日夢中になつて遊んでいると、気が付けば春が・・・。



『ベスとベラ』(アイリーン・ハース・作 たがきようこ・訳 福音館書店 1155円)

ベスというのは女の子の名前、ベラというのは小鳥の名前。雪の中、庭で一人で遊んでいるベラは友達が欲しいと考えます。そこに落ちてきたのが小鳥のベラ。南への旅立ちが遅れてしまい寒さのために落下してしまつたのですよ。さてどういふことに・・・。



『ファーディとおちば』(ジュリア・ローリンソン・文 ティファニー・ブーク・絵 木坂涼・訳 理論社 1470円)

子ギツネのファーディーは季節がかわっていくにつれて、葉っぱが茶色になつてしまった、ともだちの木が心配でたまり

ません。どんなに心配しても風が吹けば葉っぱは落ちてしまいます。すっかり落ちてしまった木の葉ですが、冬になると・・・。



『ともだちおまじない』(内田麟太郎・作 降矢なな・絵 偕成社 1260円)

7・5で綴ることばあそび(だじゃれ)絵本。「ともだちを だれよりほしい」ともだちや」「けんかして ばかはおれだといしころの」「このほしで であえたこと」ありがとう・・・。きみはどんな句が好き？



『ちいさなおひっこし』(こみねゆら・作 偕成社 1260円)

4に家族が住んでいる家が、不思議なことにどんどん小さくなつていくのです。困つた家族は新しい家を建てました。人形の家ほどに縮んだ家には、新しい住人